

プレイアッド新版『ラシーヌ全集』

柳, 光子
愛媛大学法文学部

<https://doi.org/10.15017/10015>

出版情報 : Stella. 18, pp.219-223, 1999-06-10. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

プレイアッド新版『ラシーヌ全集』

柳 光子

ラシーヌ没後 300 周年にあたる本年 3 月、待望久しかったプレイアッド叢書の新版第 1 巻が書店に並んだ。校訂者はパリ第 4 大学教授ジョルジュ・フォレストィエ。レイモン・ピカールによる旧版からおよそ半世紀を経ての改訂版刊行である¹⁾。

1995 年にパリ第 3 大学からソルボンヌへと移籍したフォレストィエは『17 世紀フランス演劇における劇中劇』『フランス演劇における同一性の美学』などの著書をもって知られる演劇の専門家であり、古典主義時代の文学を対象とする研究誌の編集者としても活躍している。フォレストィエがプレイアッド版の改訂を準備中であることはかなり前から公表されており、これまでに彼が校訂を手がけた古典劇の単独版がいずれも正確なテキストと充実した序文や註によって高い評価を得ていただけに²⁾、新版には大きな期待が寄せられていた。1995-96 年度のアグレガシオンにおける 17 世紀文学のプログラムにラシーヌの「ローマ物」3 作が指定されたさいには、当然のことながらソルボンヌでは氏による特別授業が組まれた。たまたま書評者はその授業に出席したのだが、大教室にも収容しきれないほど多数の学生が詰めかけ、後れをとった者は階段に腰を下ろし膝の上にノートを広げなければならないほどであった。第 1 回の授業では参考図書リストの配付が終わるやいなや、指定されていた版の誤りの指摘が始まったことが強く記憶に残っている。論評はその他の版にも及び、テキストの不正確や刊本校合の不徹底について手厳しい批判がつづいた。このときには自ら準備中の版に言及することはまったくなかったように思うが、それでも話の端々に並々ならぬ自信のほどがうかがわれ、新版への期待はいやが上にも高まったのである。

そもそもラシーヌを研究しようとする者にとって、準拠・参照すべき版の問題は常に頭痛の種であった。いくつもの版が存在していながら、それぞれに一

長一短があって、いずれも決定版と呼びうるものではなかったからである。戯曲以外の作品も収録し網羅性において真に「全集」の名に値するものとしては、メナール版とプレイアッド旧版とが並んで挙げられるのが常であった。まず、『エステル』『アタリー』の楽譜とアルバムを含め全10巻からなる「フランス大作家叢書」メナール版は、とりわけ第8巻の索引により研究上必須の版として定評があったが、何といたっても前世紀刊行の全集であり、その後の研究成果を反映していないのはもちろんのこと、現代的な綴り字法での引用が一般的になった今日では、17世紀の古い綴り字法を踏襲している点も不便といえは不便であった。そのうえ信頼度の高い改訂新版は入手が容易ではなく、図書館でも禁帯出が普通であり簡単に複製するというわけにもいかなかった。また、2巻からなるプレイアッド旧版も網羅性の高さにおいてすでに定評があったが——今回の新版もこれとくらべて収録内容にはほとんど変更がないと校訂者みずから述べている——、戯曲に行数表示を欠くという利便性の悪さが嘆かれていた。その他、優れた序文によって必読とされてきた版として、付録の充実したモレル＝ヴィアラ版、初演当時の資料にもとづいて注解したコリネ版、テキストの正確を誇るセリエ版などがあるが、いずれもが12の戯曲のみをおさめた「劇作集」である。

このような状況のなかで新しく登場したフォレスティエ版は、一見ただけで従来の版とは趣を大いに異にするのが分かる。初版の口絵を随所に織り込み読者の目を楽しませるが、これもただ単にヴィジュアルな効果を狙ったものではなく、ラシーヌが自らル・ブランに依頼したという全集の表紙をはじめ、採録された図版の寓意が序文で詳しく解説されている。もちろん序文の中核をなすのはラシーヌおよびその作品の懇切丁寧な概観である。また巻末に用語集を設けて広い読者層に配慮すると同時に、注解では専門的なアプローチが随所で展開される。テキストの正確な再現ならびに綴りの現代化や句読点の処理にあたって細心の注意が払われているのは言うまでもない。

このように優れた特質をそなえた本書であるが、旧版とのとりわけ大きな違いとして、配列が刷新されたことを挙げておかねばならない。まず戯曲のすべてを収録し、次いで他の詩作品をまとめるという、数世紀にわたり踏襲されてきた体裁が一変し、韻文作品のすべてが執筆年代順に並べられているのだ。とかく演劇とそれ以外とは切り離してとらえられがちだだけに、この配列は

読者に新鮮な印象を与えるであろう。さらに、全戯曲を初版を再現するかたちで収録し、作者による加筆修正はヴァリエントに回すという新機軸が採り入れられている³⁾。ラシーヌは生前に自分の全集を3度にわたって出しており、新版を準備するたびに本文にも序文にも手を入れるのが常であった。生前最後の全集は『フェードル』発表後の沈黙から約20年を経た1696年の刊行であり、この折の加筆修正はまさに「生きながら自作品を古典と見なした」行為であったらしい。このため以来3世紀にわたって出版されつづけてきた劇作品は、いずれも最後の全集を底本としてきたのである。しかしフォレストィエはあえてこの伝統を破り、「観客が見たままのラシーヌ」を読者に供する方針で臨んだ。このことが配列への考慮とあいまって、ラシーヌの劇作を時代に沿って追跡することを容易ならしめている。各戯曲の末尾に、作品をめぐる当時の論評や風刺詩など関連資料が配置されていることも、斬新な工夫であり巧みな演出であると言えよう。「古典作家ラシーヌ」に馴染んだ読者にも、さながらリアルタイムでラシーヌの創作に立ち会うかのような新たな印象が与えられるに違いない。

もちろん初版テキストは多くの先行版でもヴァリエントとして参照可能ではあったが、それが一望できるかたちで、しかも正確に再現されたことの意義は大きい。登場人物の心情が後続版にもまして的確に描写されている好例として『アンドロマック』冒頭のオレストの台詞を引こう。「私をひきずってゆく運命に、目を閉じてこの身をゆだねよう」という有名な一句は、初版すなわち初演時においては「私をひきずってゆく激情」であった⁴⁾。フォレストィエが示唆に富む注解で詳述しているように、エウリピデスの主人公たちを彷彿とさせる、終幕での幻覚をとまなう精神錯乱の場面ほどには明確な描写になっていないものの、メランコリーという病に冒されたオレスト像は、実は作品の冒頭からくり返し描かれている。つまりラシーヌは一貫して古代劇に忠実なオレストを演出しているのだが、ただしそのメランコリーの原因は、母親殺しの罪の意識から恋愛の苦悩へと置きかえられている。『アンドロマック』のオレストは母親を殺害した犯罪者ではなく、エルミオーヌへの愛がひきおこす心の病に苦しむ無垢な人間なのだ。一度は押し殺した恋情に結局は抗いえないと悟ったオレストが口走るのが、「私をひきずってゆくこの激情に、目を閉じてこの身をゆだねよう」という台詞である。この1行があってこそ第3幕でエルミオーヌ

を娶るピリュスの意志を聞かされたオレストの惑乱が正しく理解できるのであって、約30年後に「激情」が「運命」に変えられた結果、オレストの真意が読者には分かりにくくなり、「メランコリーにとりつかれた主人公」の一貫性が弱められてしまったというフォレストィエの指摘には説得力がある。なぜこのような改変がなされたのかという問いに対して彼は、晩年のラシーヌが自作に新たなイメージを与えようとしたのであり、主人公たちがひとしく悲劇的な宿命の犠牲となる作品群に統一性をもたせるためであったと答えている⁵⁾。

初版を参照する意義の一例を挙げたが、一般的にはどの版に準拠すべきかという問題はそう簡単に片づけられるものではない。作者に自分が後世に残したいと望むイメージを選択する権利を認めるべきか否かについては確かに議論の余地がある。とりわけ劇作品のばあいには、「観客が見たままの作品」を提示することの重要性は大きいと言えよう。しかしラシーヌは舞台から隔絶した場で第2、第3の全集を用意したわけではない。彼の作品はくり返し上演されており、そのなかで修正がおこなわれていったのであるから、必ずしも最終版を実際の舞台からほど遠いものと判断する必要はあるまい。つまり今回のいわば「初版の再現」によって先行各版の重要性が失われてしまうわけではないのである。どちらが優れているというのではなく、双方をあわせて繙くことにより、いっそう充実した読みが可能となるに違いない。いずれにせよこのフォレストィエ版は、一読すれば必ずや新たな視点が得られる刺激的な版であり、信頼すべき定本のひとつとして以後久しく諸家必携の一書となるであろう。

註

- 1) RACINE, *Œuvres complètes*, tome I; Théâtre-Poésie, éd. Georges FORESTIER, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1999, CVI+1803 pp. 収録されているのは、ラテン語のものをまじえた初期の韻文詩、エビグラム、『平和の牧歌』や『聖歌』などを含む韻文作品のすべてである。このほかに従来は全集の冒頭に置かれていたルイ・ラシーヌによる『回想録』が巻末に収録されている。なお、本稿において言及する主な先行各版のレフェランスは以下のとおり——*Œuvres complètes*, éd. Raymond PICARD, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2 vol., 1950-1952 (tome II; nouvelle éd. mise à jour en 1966); *Œuvres complètes*, éd. Paul MESNARD, Paris: Hachette,

coll. «Les Grands Écrivains de la France», nouvelle éd., 8 vol. et 2 albums, 1885-1888 ; *Théâtre complet*, éd. Jacques MOREL et Alain VIALA, Paris : Garnier, coll. «Classiques Garnier» 1980 ; *Théâtre complet*, éd. Jean-Pierre COLLINET, Paris : Gallimard, coll. «Folio», 2 vol., 1982-1983 ; *Théâtre complet*, éd. Philippe SELIER, Paris : Imprimerie nationale, coll. «La Salamandre», 2 vol., 1995.

- 2) このうちシーヌ作品については、『ブリタニキユス』と『バジャゼ』, ならびにアンヌ・デルベと共同校訂の『ベレニス』, クリスティアン・デルマスと共同校訂の『フェードル』がある。
- 3) ジョルジュ・クートンによるプレイアッド版『コルネイユ全集』において『ル・シッド』までの初期作品にかぎり初版が底本とされた先例がある。作者の生前最後の版の特権的なものとみならず慣例への疑念が根底にあることは確かだが、この場合は特に、作者の長いキャリアとその間の時代背景の変化が考慮された。悲喜劇であった『ル・シッド』が悲劇へと変わり、それとともに「古典主義的な」作家へと変貌をとげていったコルネイユ自身の変化が非常に大きいことも、このような処置がとられた理由のひとつである。なお『オラース』以降の作品は、誤植の多さにもかかわらず、すべて作者の存命中に出された最後の版に準拠している。
- 4) 『アンドロマック』は作者が後の版で大幅な修正をくわえた作品である。1673年版でピリュスの死を悼むアンドロマックの長台詞が削除されたのをはじめ、1676年版以降にも加筆修正が多い。1696年版で「激情 transport」が「運命 destin」に変えられたことも比較的良好に知られた変更のひとつである。
- 5) Voir l'éd. FORESTIER, pp. 1339-1343.